

英語の中間構文における被影響性と形容詞的過去分詞性

The Affectedness and the Adjectival Past Participles in English Middle Constructions

柘 植 美 波

Minami TSUGE

1. はじめに

英語の中間構文 (middle constructions) とは (1) で示されるように、動詞が他動詞であるにも関わらず、主語は具体名詞であり、修飾語を必要とする表現である。

(1) a. The book sells well.

(Jespersen (1949: 347))

b. That article reads easily.

(Randall (2010: 47))

形式は能動態であるが、(1a) の「その本はよく売れる」や (1b) の「あの記事は簡単に読める」というように、意味においては受動態の要素が見られる。どのような動詞が中間構文に関与するのかということは、筆者が知る限りではまだ明らかにされていない。

本稿の目的は、被影響性と形容詞的過去分詞性を中心とした分析を参考に、中間構文が成立する動詞の条件を分析し、事実観察を通して先行研究の問題点について議論することである。本稿の構成は以下の通りである。第2節では中間構文に関連する先行研究を概観する。第3節では大規模コーパスやインフォーマント調査で収集した例文を用いて、先行研究で明らかにされている定義を分析した後で、その定義の問題点及び筆者の提案を示し、第4節では結論を述べる。

2. 先行研究

本節では中間構文を形成できる動詞に関する先行研究を紹介する。まず2.1節で、Fellbaum and Zribi-Hertz (1989) (以下、F&Z) による被影響性と形容詞的過去分詞性を概観する。2.2節では、当該構文を許す動詞に関する記述的分析を幾つか取り上げる。最後に2.3節では2.1節と2.2節で見てきた一連の先行分析のポイントをまとめる。

2.1. 被影響性と形容詞的過去分詞性

中間構文を形成できる動詞の特徴について述べる際、被影響性 (affectedness) の概念が重要であると先行分析でよく紹介されている。この概念はHale and Keyser (1987) により提案されたもので、派生された主語、つまり同表現の基底構造にある目的語が、その動詞で示される行動に影響される場合のみ、中間構文が成立するという考えである¹⁾。当該の概念についてはF&Zも述べているが、Hale and Keyser (1987) とは違う観点で説明している。本稿ではF&Zの考えに焦点を当て、その見解を以下にまとめる。

中間構文を形成できる他動詞は、ある下位クラスに限定される。その下位クラスとは、被影響性の定義を満たせる動詞である。すなわち、英語の中間動詞の項は、その動詞によって影響されなければならない。F&Z: 28によ

ると、中間構文に必要とされている被影響性とは(2)のように定義される。

(2) 被影響性の定義

- a. 項の指示物が行為・過程が行われる前に存在する。
- b. 項が示す固有の特質が行為・過程によって変えられる。

(2)の定義にある「項」とは、中間構文の主語のことであり、主題(theme)の意味役割を持つ名詞を示す。動詞の項が(2a)と(2b)の双方とも満たしていれば、被影響性の条件を満たしているということになり、中間構文になりうる。一方、当該の項が(2a)と(2b)のどちらかしか満たしていない場合は、被影響性の条件を満たさないということになり、中間構文になれない。例えば、以下のような文が見られる。

- (3) a. This shirt washes easily. (F&Z, p.8)
- b. *This type of bridge builds easily. (F&Z, p.11)
- c. *The Eiffel Tower sees easily from my window. (F&Z, p. 11)

(3a)の文は、洗う前にシャツが存在するため(2a)を満たし、加えて洗うという行為によってシャツが清潔になることから(2b)も満たせる。これより、(3a)は被影響性の定義を満たすため、適格な中間構文となる。(3b)の建造物は、建てる前に存在するわけではない。従って、(2a)の条件に抵触するため、(3b)は非文法的な文となる。(3c)も同様に考えると、「人が見る前にエッフェル塔は存在する」と解釈できるため、(2a)の条件を満たすことができる。ところが(2b)について確認すると、「人が見ることによ

ってエッフェル塔の特質が変わるわけではない」と考えられ、(2b)に抵触する²⁾。従って、被影響性の定義を満たせず、(3c)は非文法的な中間構文となる。上述のように、被影響性の定義を満たすことができるかどうかを判断することによって、当該の文が中間構文になり得るかどうかを確かめることができる。

ところが、中間構文に関与できる動詞の中には(2)の被影響性の条件に合わないものも見られる。その代表例が(4)である。

- (4) a. This book sells well.
- b. *This book buys well. (F&Z, p.29)

(4)の動詞*sell*と*buy*はどちらも商業の取引に関するものである。(4a)の文では、「売る前に本は存在し、売るという過程を経て、その本は他人のものとなる」と考えると、(2a)と(2b)の双方とも満たしていると分析される。同様に(4b)でも、「ある人が買う前からその本は存在し、買うことによって、その本は買った場所から買い主へと移動される」と考えられるため、(2a)と(2b)の両方の条件が満たされる³⁾。ところが、(4b)は(4a)と同じくらい被影響性の条件に合うにも関わらず、動詞*buy*が関与する(4b)の文は中間構文になることができない。この違いを説明するために、提案されたものが、(5)の形容詞的過去分詞(adjectival past participles)の条件である。

- (5) 形容詞的過去分詞になれる動詞のみが中間構文に関与できる。
- (6) a. The sold books are on the bottom shelf. (F&Z, p. 29)
- b. *The bought books are in the back. (F&Z, p.30)

形容詞的過去分詞とは (6) の *sold* や *bought* のような表現であり、名詞の前に置かれ、形容詞の働きを持つ過去分詞のことである⁴⁾。被影響性の条件で説明できない動詞 *sell* と *buy* が関与する形容詞的過去分詞に着目すると、(6) のような違いが見られる。(6a) の形容詞的過去分詞 *sold* は認可されるが、(6b) の *bought* は認可されない。(4b) の動詞 *buy* が関与する中間構文が不適格になるのは、(6b) のように形容詞的過去分詞が認可されないからである。形容詞的過去分詞は分類 (classifying) の意味効果と相関する。例えば、(6a) のように名詞の前に形容詞的過去分詞 *sold* を置くことで、「売れた本」と「売れていない本」というように名詞を分類できる。この分類が英語の中間構文を特徴づける重要な意味効果となる。

上述のように、(2) の被影響性の条件と (5) の形容詞的過去分詞性の条件の両方を満たすことができる動詞は、中間構文を形成できる他動詞の下位クラスであると分類されている。

2.2. 中間動詞に関する記述的分析

中間構文に関与できる動詞についての記述的分析をここで紹介する。まず2.2.1節では、Vendler (1967) と Kaga (2007) を参考に、相に関する分析を述べる。2.2.2節で影山 (1998) と Rapoport (1999) による状態変化動詞について紹介し、2.2.3節では Clark and Clark (1979) による名詞由来転換動詞について取り上げる。2.2.4節では、Kaga (2007) の創造・与格・受取を表す動詞とラテン語由来の動詞の分析について概観する。

2.2.1. 相に関する分析

2.1節の被影響性の他にも、動詞の相 (aspect) に関する分析について言及されることが多い。その分析は、動詞の相の特徴が中間構文

で重要な役割を果たすというものであり、Vendler (1967) が示した英語の動詞の4分類の中でどのタイプの動詞が中間構文に関与しやすいのかということが紹介されている。まずは、Vendler (1967) の動詞の4分類について以下で紹介する。

相とは時間の概念に焦点を当て、完了相 (telic) と未完了相 (atelic) の2つに分かれる。完了相とは終結や到着点を持つものであるが、一方、未完了相とは終結や到着点を持たないものである⁵⁾。この時間の概念により、英語の動詞は活動動詞 (activity verbs)、達成動詞 (accomplishment verbs)、到達動詞 (achievement verbs)、状態動詞 (state verbs) の4つに分かれる。

1つ目の活動動詞は、未完了相に該当し、*run*, *walk*, *push* などが当てはまる。例えば、“She was running at time (*t*).” の場合、時間 *t* は「彼女が走っていた時間の中の全範囲」であり、限定的でない期間を示す。2つ目の達成動詞は完了相であり、*draw* や *make*, *read* などが属する。例えば、“She was drawing a circle at *t*.” の場合、*t* は「彼女が円を描いたという時間の範囲」を示す。従って、この種の動詞は限定的な期間を示す。3つ目の到達動詞は完了相に当てはまり、限定的な瞬間を含む。この種の動詞として *die*, *recognize*, *win* などが挙げられる。“She won a race between *t*₁ and *t*₂.” の場合、「彼女が *t*₁ と *t*₂ の間はレースに勝っていた」という或る時間の中の瞬間を表す。4つ目の状態動詞とは未完了相に該当し、限定的でない瞬間を示すものであり、動詞 *have* や *know*, *love* などが属する。例えば、“She loved somebody from *t*₁ to *t*₂.” の場合、「彼女がその人を愛した」という *t*₁ と *t*₂ の間の全瞬間を示す。

英語には動詞は多く存在するが、上述の4分類の中で少なくとも1つのカテゴリーに属する。そのカテゴリーとは、該当の動詞を進

行形にした場合、時間の概念に着目すると、どのような意味が含まれるのかという基準により分けられる。上述の例より、活動動詞と達成動詞は進行形になれるが、到達動詞と状態動詞については進行形になれない⁶⁾。

Vendler の動詞の4分類の中で、中間構文になれる動詞を特定している分析が幾つかある。以下、Kaga (2007) を参考にまとめる。Fagan (1992) によると、(7) で示されているとおり、活動動詞と達成動詞は適格な中間構文を形成できるが、到達動詞と状態動詞は同表現を形成できない。

- (7) a. The car drives easily.
 b. This book reads easily.
 c. *A red-winged blackbird recognizes easily.
 d. *The answer knows easily.

(Kaga (2007: 198))

(7a) の *drive* のような活動動詞と (7b) の *read* のような達成動詞が関与する中間構文は適格となる。一方、(7c) の *recognize* の到達動詞と (7d) の *know* のような状態動詞が関与する中間構文は不適格となる。ところが、Tenny (1987, 1994) はFagan (1992) と異なり、達成動詞と到達動詞のみが中間構文に関与でき、活動動詞と状態動詞は同表現に関与できないと主張している。どちらの意見が正しいのかについては本稿では論点にしないが、両者の意見の共通点のとおり、達成動詞は中間構文を認可する。動詞の相の特徴により、当該構文に関与できるものとできないものがあるということが明らかになっている。

ところが、相の特徴を用いた分析について、問題点が幾つかあると指摘されている。1つ目は、(4) のような動詞 *sell* と *buy* が関与する中間構文について説明できないということ

にある。両者とも同じ相の特徴を持ち、達成動詞に分類すると考えられるため、予測では双方とも中間構文が成立する。ところが、動詞 *buy* は中間構文を許す達成動詞に属するにも関わらず、その動詞が関与する表現は不適格となる。2つ目は、動詞の中にはどの相のタイプに属するのか決められないものもあるということである。例えば、動詞 *touch* は文脈によって4つのタイプに属するため、適格な中間構文を形成できるかどうか判断が難しい。

- (8) a. The child is touching the breakable glassware.
 b. Hannah touched all the buttons in the elevator to make them light up.
 c. Just then he touched the buzzer.
 d. The wainscoting touches the floorboard at a right angle all along the southern wall. (Kaga (2007: 200))

(8a) は活動動詞、(8b) は達成動詞、(8c) は到達動詞、(8d) は状態動詞として用いられる。しかし幾つかの先行文献では、動詞 *touch* は (9) のように中間構文不可と説明されている。

- (9) *That cat touches easily. (Kaga (2007: 200))

動詞 *touch* は4つのタイプに属することができ、(9) の文はどの相のタイプに入るのかが不明であるため、(9) が非文法的な文となる理由について説明できない。筆者が知る限りでは、上述の問題点を解決できる分析はなく、相に関する分析については被影響性の分析ほど明らかな説明ができないとKaga (2007) も述べている。

上述より、動詞の相の特徴の点から、中間

構文に関与できるのは達成動詞であると考えられている。しかし動詞の中には相の観点では十分に説明できないものもあると指摘されている。

2.2.2. 状態変化動詞

先行分析の中には、状態変化動詞 (change of state verbs) が英語の中間構文に現れることができる主要クラスの動詞であると論じるものがある。状態変化動詞とは「対象物がある状態に変化する」という意味を持ち、例えば *The metal cooled* の場合、「金属が冷めた状態に移っていく」という意味になる。(10)の動詞は状態変化動詞として分析されている。

- (10) a. Small cars sell well.
 b. This door won't unlock easily.
 (影山 (1998: 276))

また状態変化動詞の中でも、非対格構文 (unaccusative constructions) で現れることができる動詞は、(11) のように中間構文を形成できる。Rapoport (1999) はこのタイプを単純な状態変化動詞 (simple change of state verbs) と示している。

- (11) a. This kind of glass breaks easily.
 b. Milk chocolate melts smoothly.
 (Rapoport (1999: 149))

(11) の動詞は protoagent を含意し、その中間構文では動作主 (agent) が見られないとされる⁷⁾。加えて Rapoport (1999) によると、道具 (instrument) または様態 (manner) を示す状態変化動詞も中間構文を許可し、(12) のような例が見られる。

- (12) a. This kind of bread cuts easily.

- b. This wood carves easily.
 (Rapoport (1999: 150))

(12) の道具や様態を示す状態変化動詞 (the I/M COS verbs) には動作主が含意され、この点が (11) の単純な状態変化動詞とは異なる。(12) のように道具や様態の要素があれば、「ある行為者がその道具を用いて対象物のある状態へと変える」と解釈でき、その構文には動作主が含意する。(12a) は「ある行為者はある道具を用いてパンを切った状態にする」となり、(12b) も同様の解釈ができる。中間構文も潜在的動作主を含むため、(12) の動詞は適格な中間構文を形成できる。

上述のように、行為者の視点から結果状態を注視すると解釈できる状態変化動詞が中間構文の形成を許可する。状態変化動詞が用いられるということは、同表現には潜在的動作主が含意されるということに繋がり、当該構文の主要な特徴について裏付けることができる。加えて、道具や様態を示す状態変化動詞も中間構文に関与でき、この場合においても動作主が含まれることを意味する。

2.2.3. 名詞由来転換動詞

英語の動詞の中には、名詞由来転換動詞 (denominal conversion verbs) と呼ばれるものがある。転換とは、ある項目に接辞を付加せず、他の項目に変えるという語形成プロセスであり、名詞から動詞へと転換された動詞が名詞由来転換動詞である。Clark and Clark (1979) は英語の名詞由来転換動詞をいくつかのタイプに分けて分析している。例えば、場所移動動詞 (locatum verbs) と呼ばれるものがあり、その例は (13) のとおりである。

- (13) Jane blanketed the bed.
 (Clark and Clark (1979: 769))

(13) は「Janeはベッドに毛布をかけた」という文であり、この動詞 *blanket* は解釈上「毛布が移動した」と考えられるため、場所移動を示す動詞として分類される。

Clark and Clark (1979) によれば、場所移動を表す名詞由来転換動詞の中には、中間構文になれるものがあり、(14) のような例が見られる。

- (14) a. The wall papered nicely.
 b. The floor swept easily.
 (Clark and Clark (1979: 771))

他動詞用法がある動詞については中間構文が可能となり、動作主によって引き起こされる結果を表す。(14a) の動詞 *paper* は「壁紙を貼る」という意味で、「行為者が壁紙を壁に貼ることより、壁紙が移動する」と解釈になる。(14b) も同様に、「床を箒で掃くことにより、箒が床へ移動する」と考えられるため、動詞 *sweep* も場所移動を表す。従って、(14) のように場所移動を表す名詞由来転換動詞の中で他動詞用法があるものについては、中間構文を形成できる⁸⁾。

2.2.4. 創造・与格・受取を表す動詞とラテン語由来の動詞

Kaga (2007) が示した中間構文に関与できる動詞あるいは関与できない動詞について概観する。本節では創造を表す動詞と与格を表す動詞、受取を表す動詞の3種類に焦点を置き、順次見ていく。

創造を表す動詞 (creation verbs) は一般に中間構文に関与できず、(15) のように例証されている。

- (15) a. *These cabinets build easily.
 b. *A novel writes easily.

(Kaga (2007: 201))

創造を表す動詞は典型的な達成動詞であるため、中間構文を形成できると予測されるが、(15)はその予測に反した結果となる。従って、相の特徴では(15)について説明できず、先行分析ではその理由が明らかにされていない。ところが、ある種の創造を表す動詞は中間構文が認可される。その例は(16)のとおりである。

- (16) a. This kind of house constructs easily.
 b. This type of cup forms easily.
 (Kaga (2007: 201))

(16) の動詞 *construct* と *form* はラテン語由来の動詞である。一方、(15) の動詞 *build* と *write* はどちらもネイティブ素性を持つ動詞である。かくして、(15) と (16) は同じ意味を表すが、由来の違いによって中間構文の受け入れ可能性が変わることがある。

与格動詞 (dative verbs) や受取を表す動詞 (obtaining verbs) についても創造を表す動詞と同様の現象が見られる。通常、(17a) と (17b) のような与格動詞や (17c) のような受取を表す動詞は中間構文を形成できない。

- (17) a. *That kind of book gives easily.
 b. *This technique shows easily.
 c. *That book gets easily.
 (Kaga (2007: 202))

(17) の他にも、与格動詞として動詞 *show*、加えて受取を表す動詞として動詞 *buy* が挙げられている。ところが、ラテン語由来の与格動詞や受取を表す動詞は中間構文を形成できる。

- (18) a. The money donates easily.
 b. This technique demonstrates easily.
 c. That book obtains easily.

(Kaga (2007: 202))

(18) の動詞 *donate*, *demonstrate*, *obtain* は全て (17) の動詞に対応するラテン語由来のものである。従って、与格動詞と受取を表す動詞についても (17) のようなネイティブ由来であれば中間構文に関与できないが、(18) のようなラテン語由来の動詞のみ当該構文に関与できる。

上述のとおり、創造・与格・受取を表す動詞は通常、中間構文を形成できないが、形成できるものも見られる。その動詞の語種に着目すると、本来語動詞は当該構文に関与できないが、ラテン語由来の動詞のみ関与できるということが明らかにされている。

2.3. まとめ

本節で扱った被影響性と形容詞的過去分詞性、及び中間動詞に関する先行研究のポイントをここでまとめる。同表現を形成できる動詞、あるいは形成できない動詞の特徴は3つある。

まず2.1節より、被影響性の定義を満たし、かつ形容詞的過去分詞になれる動詞が中間構文に関与できる。被影響性については、Hale and Keyser (1987) や F&Z が提示しているが、形容詞的過去分詞については F&Z のみが提案している。F&Z によると、その動詞が上述2つの条件を満たすかを確かめることで、中間構文を認可する動詞か否かを判断できる。

2つ目は、中間構文に関与できる動詞として、達成動詞や状態変化動詞、場所移動を表す名詞由来転換動詞が挙げられるということである。これは2.2.1節から2.2.3節の Clark and Clark (1979) や Kaga (2007), 影山 (1998),

Rapoport (1999) が述べている。状態変化動詞については、道具や様態を表す表現も多いということが明らかになっている。

3つ目は、2.2.4節の Kaga (2007) の分析より、創造を表す動詞や与格動詞、受取を表す動詞については通常中間構文を形成できないが、それに対応するラテン語由来の動詞については当該構文を形成できるということである。

しかしながら一連の先行研究を調査していく中で、中間構文に関与できる動詞について明らかにされていない点がある。それは、全ての中間構文が被影響性と形容詞的過去分詞性の両方の条件を満たせるのかということである。F&Z は中間構文を形成できる英語の全ての動詞について言及していない。とりわけ、上述の先行研究の2つ目と3つ目のポイントとして挙げた動詞における被影響性と形容詞的過去分詞性について調査されていない。

3. 提案

前節でまとめたように、F&Z が提示した被影響性の条件と形容詞的過去分詞性の条件が中間構文に関与できる全ての動詞に適用できるのかどうか明らかにされていない。本節では、上記2つの条件を用いて中間構文に関与できる動詞、あるいは関与できない動詞を特定できるかどうかを検証する。まず3.1節で、1億語の大規模コーパス *British National Corpus* (以下、BNC) あるいは英語のネイティブスピーカーによるインフォーマント調査によって収集した、97種類の動詞に関与する表現について分析し、従来の先行研究の分析が正しいのかどうかを考察する⁹⁾。3.2節、3.3節、3.4節では、その分析結果や問題点を通し、どのような条件であれば説明できるのかという提案を述べる。

3.1. 事実観察とデータ分析

大規模コーパスBNCで97種類の動詞から形成される中間構文と形容詞的過去分詞の表現を収集し、検証する。本稿では被影響性と形容詞的過去分詞性の2つの条件で中間構文を形成できる動詞か否かを説明できるのかを検証するため、先行文献により中間構文の形

成が可能である動詞、かつ形成不可とされてきた動詞について調査していく。本稿で検証していく97種類の動詞については(19)の表のとおりである。*が付いていない動詞は先行研究で中間動詞が可能であると指摘されているものであり、*が付いているものは中間構文が不可と指摘されているものである。

(19) 検証する97種類の動詞

	動詞のラベルと数	動詞の内訳	
中間 構文 可	Ⓐ状態変化動詞 - <i>break</i> 動詞 - (7個)	break ₁ , chip, crack, crash, shatter, snap, tear	
	Ⓑ状態変化動詞 - <i>bend</i> 動詞 - (4個)	bend, crease, fold, wrinkle	
	Ⓒ状態変化動詞 - 料理 - (3個)	bake, cook, heat ₁	
	Ⓓ状態変化動詞 - その他 - (14個)	abate ₁ , advance ₁ , age ₁ , alter ₁ , atrophy ₁ , balance ₁ , burn ₁ , burst ₁ , change ₁ , close ₁ , dry ₁ , melt ₁ , open ₁ , sink ₁	
	Ⓔ中間構文と能格構文のどちらも形成可能な動詞 (8個) ※全24個中16個が他ラベルと重複	abate ₂ , advance ₂ , age ₂ , alter ₂ , atrophy ₂ , balance ₂ , break ₂ , burn ₂ , burst ₂ , change ₂ , close ₂ , dry ₂ , fall, fit, flow, hang, heat ₂ , melt ₂ , move, open ₂ , roll, sink ₂ , slide, turn	
	Ⓕ作成動詞 (6個)	build, construct, crop, form, make, root	
	Ⓖ官僚言語の動詞 (6個)	bribe, maneuver, transfer, translate, transmit, transpose	
	Ⓗ達成動詞 (6個)	finish, photograph, read, recover, score, use	
	Ⓘ結合・混合を表す動詞 (4個)	add, blend, merge, shake	
	Ⓙ「切る」を表す動詞 (5個)	carve, clip, crush, cut, split	
	Ⓚ名詞由来転換動詞 (5個)	band, bruise, fish, paper, record	
	Ⓛ道具を表す動詞 (2個)	prick, sting	
	Ⓜ「回す」を表す動詞 (3個)	coil, curl, spin	
	Ⓝ「置く」を表す動詞 (2個)	position, shelve	
	Ⓞラテン語由来の動詞 (3個)	demonstrate, donate, obtain	
	Ⓟその他 (7個)	draw, drive, handle, keep, serve, slip, stow	
	不可	Ⓠ働きかけ動詞 (4個)	*hit, *perform, *play, *pound
		Ⓡ三項述語の動詞 (2個)	*give, *teach
		Ⓢその他 (6個)	*die, *drink, *hate, *reach, *swallow, *write

先行研究を参考に動詞を意味的に分類し、Ⓐ～Ⓢのラベルで示している¹⁰⁾。動詞の中で、他のラベルにも当てはまるような重複しているものについては、その動詞の右下に番号を付けている。その重複した動詞で「2」が付けられたものについては、動詞を数える際、その数に入れていない。例えば、動詞 *break* はⒶの状態変化動詞に当てはまるが、Ⓔの能

格構文にもなれる動詞としても分析されている。その動詞に「1」が付いたⒶではそのラベルの数に入れていないが、「2」の付いたⒺではその数に入れていない¹¹⁾。(19)の動詞以外にも、中間構文になれる動詞はあるが、本稿では上述の動詞に絞って、分析していく。

BNCで検索した中間構文については、3つの主要な特徴を満たしているか確認した上で

収集している。その特徴として、1つ目に潜在的動作主が含まれているということ、2つ目に副詞または法助動詞 *can* が存在すること、3つ目に総称的な文であるということ、を挙げる¹²⁾。例えば、(20) の文では中間構文に必要な3つの特徴が見られる。

(20) The car *drives* beautifully, in fact the throttle response from the 1870 cc engine is almost petrol sharp. (BNC: K97)

(20) は動作主を示す表現が含まれていないが、運転するとなると、その車の運転主が存在すると解釈できることから、潜在的動作主が含まれると考えられる。また、この動詞は単純現在形で示され、副詞 *beautifully* と共起するため、その車に関する特徴を表すという総称的な文であることがわかる。

表 (19) で示した97種類の動詞から形成さ

れる中間構文と形容詞的過去分詞の表現が、F&Zの被影響性と形容詞的過去分詞性の条件で説明できるのかどうかを分析した。以下、被影響性の条件をA、形容詞的過去分詞性の条件をBとして示す。

A. 被影響性の条件 (= (2))

- i) 項の指示物が行為・過程が行われる前に存在する。
- ii) 項が示す固有の特質が行為・過程によって変えられる。

B. 形容詞的過去分詞の条件 (= (5))

形容詞的過去分詞になれる動詞のみが中間構文に関与できる。

(19) の動詞が関与する表現がAとBを満たせるかどうか検証した結果、(21) の表で示されたとおり、大きく4つに分かれた。

(21) 被影響性 (A) と形容詞的過去分詞性 (B) に関する分析結果

AとB両方とも満たせる動詞		
動詞の数	動詞の内訳	ラベル別
37	<中間構文を形成できる動詞> break ₁ , chip, crack, crash, shatter, tear, bend, crease, fold, wrinkle, bake, cook, advance ₁ , age ₁ , alter ₁ , atrophy ₁ , burn ₁ , burst ₁ , change ₁ , dry ₁ , melt ₁ , (advance ₂ , age ₂ , alter ₂ , atrophy ₂ , break ₂ , burn ₂ , burst ₂ , change ₂ , dry ₂ , melt ₂ ,) bribe, transfer, translate, transpose, recover, add, blend, merge, carve, clip, crush, cut ₁ (主語が ^s theme), split, bruise	㉑状態変化 (<i>break</i>) 6 ㉒状態変化 (<i>bend</i>) 4 ㉓状態変化 (料理) 2 ㉔状態変化 (その他) 9 (㉕中間・能格 10) ㉖官僚言語 4 ㉗達成 1 ㉘結合・混合 3 ㉙「切る」 5 ㉚名詞由来転換 1
	<中間を形成できない動詞> *pound, *swallow	㉑働きかけ 1 ㉓その他 1

Aのみ満たせない動詞		
動詞の数	動詞の内訳	ラベル別
50	<中間構文を形成できる動詞> snap, heat, balance ₁ , close ₁ , open ₁ , sink ₁ , balance ₂ , close ₂ , fall, fit, flow, hang, heat ₂ , move, open ₂ , roll, sink ₂ , turn, build, construct, crop, form, root, transmit, finish, photograph, read, score, use shake, cut ₂ (主語がinstrument), band, paper, record, prick, sting, coil, cur, spin, position, shelve, demonstrate, donate, obtain draw, drive, handle, keep, slip, stow	㊸状態変化 (<i>break</i>) 1 ㊿状態変化 (料理) 1 ㊾状態変化 (他) 4 ㊽中間・能格 7 (12) ㊴作成 5 ㊳官僚言語 1 ㊲達成 5 ㊱結合・混合 1 ㊰「切る」 1 ㊯名詞由来転換 3 ㊮道具を表す 2 ㊭「回す」 3 ㊬「置く」 2 ㊫ラテン語由来 3 ㊪その他 6
	<中間構文を形成できない動詞> *hit, *play, *give, *teach, *hate, *write	㊩働きかけ 2 ㊨三項述語 2 ㊧その他 2

Bのみ満たせない動詞		
動詞の数	動詞の内訳	ラベル別
5	<中間構文を形成できる動詞> abate ₁ , (abate ₂), maneuver,	㊾状態変化 (その他) 1 (㊽中間・能格 1) ㊿官僚言語 1
	<中間構文を形成できない動詞> *die, *drink, *reach	㊧その他 3

AとB両方とも満たせない動詞		
動詞の数	動詞の内訳	ラベル別
5	<中間構文を形成できる動詞> slide (??/?), make (??/?), fish (??/?) OK), serve (??/?)	㊽中間・能格 1 ㊴作成 1 ㊯名詞由来転換 1 ㊪その他 1
	<中間構文を形成できない動詞> *perform	㊲働きかけ 1

表 (19) で、中間構文が可能とする85種類の動詞の内、77種類の動詞がBNCで中間構文として使われていることが確認できた。BNCで検索できなかった動詞については、2名のネイティブスピーカーによるインフォーマント調査で確かめている。1名のみ受け入れ可能と回答し、もう1名はややぎこちないと回答した場合、本分析ではその表現は認可されるものとしてみなす。

表 (21) のとおり、「AとB両方とも満たせる動詞」が37個、「Aのみ満たせない動詞」が50個、「Bのみ満たせない動詞」が5個、そして「AとB両方とも満たせない動詞」が5個という結果になった。この結果については、3.1.1節から3.1.4節で順次詳しく述べる。

3.1.1. 被影響性と形容詞的過去分詞性の両方とも満たせる動詞

表 (21) の「AとBの両方とも満たせる動詞」について見ていく。この種の動詞の例が、(22)–(26) に示されている。以下はそれぞれ aの文が中間構文であり、bの文が形容詞的過去分詞の表現である。

- (22) a. Horsetail is the oldest species of plant still surviving. Its wiry black roots go very deep and *break* readily, so it is difficult to eradicate. (BNC: A0G)
 b. Even damaged or *broken* objects can be useful. (BNC: HXF)
- (23) a. But bread with 5 per cent guar *bakes* well and tastes like ordinary bread. (BNC: B76)
 b. He eats *baked* beans each day and takes baths in the tinned food. (BNC: CH6)
- (24) a. Cellular plastic is easy to use. It *cuts*, screws and nails just like wood.

(BNC: ECJ)

b. I like, let's see, I like *cut* flowers in the house. (BNC: KCV)

(25) a. Many of the techniques of scientific management have been developed in private industry and commerce. They do not always *transfer* easily to the public sector. (BNC: ED5)

b. If the ground is allowed to dry out before newly *transferred* plants have recovered from the unavoidable root damage, or container-grown ones have developed a strong root system, growth will be severely set back and they may die. (BNC: EDG)

(26) a. Characterful coffees, rich in flavor with high acidity, Colombian coffees *blend* well. (BNC: ABB)

b. Finally, in section 6.6 we look at Multiview, a *blended* methodology for developing applications, using the methods, techniques and tools which are appropriate for a particular situation. (BNC: HRK)

(22)–(26) の動詞はAとBを満たすことができ、その2つの定義で文法的な中間構文を形成できると説明できる。(22a)の動詞*break*は、Ⓐ状態変化動詞の*break*動詞に分類され、能格構文にも関与できるタイプⒺにも当てはまる。(Aii)の条件については「壊れるという過程を経て、スギナという植物の様子が変わる」と考えると、主語名詞が物理的に変化していると考えられる。(22)の結果になったのは、Ⓐの全7個の中でその他の*chip*, *crack*, *crash*, *shatter*, *tear*を併せると6個の動詞であり、*break*のように状態変化動詞の中でⒺにも当てはまる動詞は全16個中10個という結果

になった。加えて、(23a)の動詞 *bake* は◎状態変化の料理を表す動詞であるが、(Aii)の条件を考えると「焼くという過程より、パンの色や食感も変わる」となる。◎の3種類の動詞の中では *cook* が(23)の結果になった。そして、(24a)の動詞 *cut* は①の「切る」を表す動詞である。(Aii)については「切るという過程を経て、プラスチックの形が変わった」と考えられるため、Aを満たせる。(24a)のように、主語が主題を表す中間構文が多く見られた。①の「切る」を表す5つの動詞は全て(24)のような結果となった。その他にも、◎の官僚言語の動詞については6個中4個の動詞が(25)の動詞 *transfer* のような結果となり、①の結合・混合を表す動詞については4個中3個の動詞が(26)の動詞 *blend* のような結果となった。以上の動詞については、AとBを用いて中間構文が可能であると予測でき、事実と合う。

ところが、AとBを満たせる動詞の中には中間構文を取れないとされているものがある。その例を(27)と(28)で示す。

- (27) a. *This wall *pounds* easily.
(影山(1998: 243))
- b. The Romans soaked the *pounded* seed in wine and the word mustard is thought to come from the Latin *mustum ardens* meaning “burning must” -- grape must is newly-fermented grape juice. (BNC: FEB)
- (28) a. *This medicine *swallows* easily.
(筆者のインフォーマント調査)
- b. A small, sick feeling lay in Wayne like a *swallowed* stone. (BNC: FYY)

◎働きかけ動詞については、(27a)のように中間構文になれない¹³⁾。しかし動詞 *pound* の

表現(27a)にAを適用すると、「叩くという行為の前に壁は存在する」、加えて「叩くという行為によって壁の外見は変えられる」と考えられるため、被影響性を満たせる。(27b)で示されるように、動詞 *pound* は形容詞的過去分詞になれる。AとBの両者とも満たせるため、動詞 *pound* は中間構文に参与できると予測されるが、実際には当該構文に参与できないと分析される。同様に(28)の動詞 *swallow* も先行文献で中間構文を形成できないとされており、BNCで検索しても関連構文が見つからなかった。インフォーマント調査で(28a)の文を確認したところ、1名が「非文法的」と回答、もう1名は「ややごちない」と回答したため、動詞 *swallow* は中間構文を形成できないと考えることにする。しかしながらAを考えると、(28a)の文は「飲み込むという行為の前に薬が存在し、飲み込まれた後、薬は元に戻すことができないくらい変化している」と解釈できるため、Aを満たせる。(28b)のように形容詞的過去分詞にもなれるため、AとBを満たすことになる。従って、動詞 *swallow* については被影響性と形容詞的過去分詞性で中間構文の形成が可能かどうか予測できない。

AとBを両者とも満たせる動詞が97個中37個という結果になった。この中で、AとBで説明できる動詞は37個中35個あったため、ほとんどの動詞については被影響性と形容詞的過去分詞性で予測できる。しかし(27)の動詞 *pound* と(28)の *swallow* のように、被影響性と形容詞的過去分詞性が問題なく満たされるにも関わらず、事実では不適格な中間構文となるものが存在するということが明らかになった。

3.1.2. 被影響性のみ満たせない動詞

3.1.1節では、「AとBの両方とも満たせる

動詞」について紹介したが、3.1.2節からはその2つの定義を満たせない動詞について述べる。まずは「Aのみ満たせない動詞」について紹介する。このタイプは、事実観察では中間構文も形容詞的過去分詞も見られるが、その中間構文がAで説明できないものである。この結果に該当する動詞の例は(29)-(36)である。

- (29) a. All airbrakes *close* fully before they lock. (BNC: A0H)
 b. No one knew how a *closed* system of this size would behave. (BNC: K2X)
- (30) a. Queues *form* quickly after rumors of new supplies. (BNC: CB8)
 b. Over a thousand men stood in a *formed* square on a muddy field somewhere in France. (BNC: K8T)
- (31) a. On the whole the translation *reads* well. (BNC: BMK)
 b. Librarians check the *read* books as soon as possible and repair the damaged parts.
 (筆者のインフォーマント調査)
- (32) a. I think Cilla doesn't *photograph* well. She's not photogenic. (BNC: KPU)
 b. I would like to see the *photographed* woman, who looks friendly and gives a good impression.
 (筆者のインフォーマント調査)
- (33) a. The hollow-ground blade, made from chrome-plated carbon steel, will *cut* cleanly through branches of up to three-inches in diameter. (BNC: CH1)
 b. Wynne-Jones constructed a fire and pushed *cut* fragments of the wild pig over the flames. (BNC: HTM)

- (34) a. A pile of newspapers *bands* easily because its shape and size are the same.
 (筆者のインフォーマント調査)
 b. Here two plain *banded* rings have been attached at right angles to the bit of a key. (BNC: G30)
- (35) a. This wall *papers* well. I think its quality is also very good and it will be popular from now on.
 (筆者のインフォーマント調査)
 b. The woman who works at home erodes, shrinks and expands again to the contours of her *papered* walls. (BNC: EDU)
- (36) a. *We carry our wallets whenever we go outside. The money *donates* easily.
 (筆者のインフォーマント調査)
 b. This gives shoppers the right to purchase *donated* goods at very low prices. (BNC: K51)

上述の動詞については、全て形容詞的過去分詞が成立するため、Bを満たせる。Aを満たせない理由について順次見ていく。まず(29)の動詞*close*は①状態変化動詞並びに⑥能格構文になれる動詞に当てはまる。(29a)は(Ai)を満たすことができるが、閉めることによってエアブレーキの特質は変わらないと考えられるため、(Aii)に抵触する。動詞*close*以外にも、6個の状態変化動詞と12個の能格動詞が(29)のような結果となった。⑥作成動詞に入る動詞*form*については(30)のような例が見られた。(30a)は「作るという過程の前に列は存在しない」ため、Aiを満たせない。⑥の作成動詞については他の*build*や*crop*など全5個の動詞がAiを満たせないが、実際には中間構文の表現が見られるた

め、当該条件を使って説明できない。(31)の動詞 *read* と (32) の動詞 *photograph* は㊦達成動詞に分類される。この種の動詞は中間構文を認可できると分析されてきたが、Aを満たすことができず、事実と矛盾する。(31a)は「読むという過程によって翻訳の文や内容が変わる」とは考えられないためAiiに抵触する。同様に、(32a)も「写真を撮るという過程によってCillaも写真に写ったCillaも変わらない」と考えられるため、Aiiを満たせない。本分析で扱った達成動詞6個の中で5個がAを満たすことができずという結果になった。とりわけ動詞 *read* は中間構文を形成できる動詞の代表例でもあるが、Aの被影響性に抵触する。因みに、動詞 *read* と *photograph* の形容詞的過去分詞がBNCで検索できなかったため、インフォーマントで確認したところ受け入れ可能な表現となった。形容詞的過去分詞についてインフォーマントで確認できたが、BNCでは *easy-read* や *well-photographed* のような「副詞+形容詞的過去分詞」という形式の例が多く見られた。この形容詞的過去分詞についても注目すべき点であると思われる。

次に、(33)の *cut* は㊧「切る」を表す動詞が関与する表現であるが、(33a)は3.1.1節の(24a)とは異なるタイプである。(24a)の主語は主題 (theme) を表すが、(33a)の主語は道具 (instrument) を表している。(33a)の場合、切る前に研磨された刃は存在するためAiを満たせるが、切る過程によって刃の特質は変わらないと考えられるためAiiに抵触する。(34)の *band* は㊨名詞由来転換動詞であり、(34a)を分析すると、Aiは満たせるが、「紐で縛ることによって、一束の新聞紙の特質が変わるのかどうか不明」と考えられ、Aiiに抵触すると判断される。(35)の *paper* も㊨名詞由来転換動詞に当てはまるが、

Aを満たせない。(35a)の場合、ポスターを貼る前に壁は存在するためAiを満たせるが、「ポスターが貼られるという過程を経て、その壁の特質に変化が生じる」とは考えられないため、Aiiに抵触する。また(36a)の *donate* は㊩中間構文になれるラテン語由来の動詞であるが、「寄付するという過程によってお金の特質が変わるわけではない」と考えられるためAiiを満たせない。先行研究ではラテン語由来の動詞は中間構文に関与できると述べられていたが、インフォーマントで確認したところ、受け入れ不可な表現と回答があった。ラテン語由来の動詞については、動詞 *obtain* の中間構文も確認したが、*donate* と同様、受け入れられない表現という結果になった¹⁴⁾。この点については、Kaga (2007) の分析 (本稿の2.2.4節) と矛盾が生じる。動詞 *donate* は中間構文に関与できないということであれば、AとBの定義を満たせないという予測と合うことになる。

上述のように、本稿で分析した97個の動詞の中で「Aのみを満たせない動詞」が50語あり、この内42語は中間動詞になれることが判明した。この結果は、被影響性と形容詞的過去分詞性のみでは中間構文に関与できる動詞について十分な説明ができないことを表している。

3.1.3. 形容詞的過去分詞性のみ満たせない動詞

3.1.2節では「Aのみ満たせない動詞」について扱ったが、「Bのみ満たせない動詞」も97個中5個見られた。3.1.3節ではその結果になった動詞について紹介する。Bのみ満たせない動詞は以下の通りである。

- (37) a. These so-called services will continue. They will *abate* only

- slightly as a result of the recent rules. (BNC: HHX)
- b.^{*/?} The *abated* price of that product was not reasonable at all, so nobody bought it.
(筆者のインフォーマント調査)
- (38) a. The Russians *maneuver* easily.
(Keyser and Roeper (1984: 393))
- b.^{??/?} I suspect that *maneuvered* man because he clearly acts as instructed by somebody and thus he seems to plan something evil.
(筆者のインフォーマント調査)
- (39) a. The tradition of several centuries does not *die* easily. (BNC: AMG)
- b.^{*/*} Japanese performed this ceremony 100 years ago, but we have not held it in modern times. I am reaching this *died* tradition.
(筆者のインフォーマント調査)
- (40) a. It(=The Moscato)*drinks* wonderfully with chocolate desserts.
(BNC: A0C)
- b.^{??/?} This is the *drunk* juice. You should dispose it immediately without drinking.
(筆者のインフォーマント調査)
- (41) a. The green copper cupolas and complex wireless aerials on the roof *reach* importantly into the blue of the sky. (BNC: J17)
- b.^{??/?} I will definitely climb the top of the mountain. I am looking forward to seeing the beautiful landscapes at the *reached* summit.
(筆者のインフォーマント調査)

(37)–(41) の動詞が関与する形容詞的過去分

詞がBNCで検索できなかったため、bの文を用いてインフォーマントチェックによる調査を行ったところ、全て受け入れ不可能という回答を得た。その結果、Aについては満たすことができるものの、Bが満たせないということがわかった。例えば、動詞 *abate* は①状態変化動詞と②能格構文になれる動詞に属するが、(37a) を考えると「下げるという過程の前にサービスは存在し、下げた後でサービスの特徴が変わる」と捉えられるため、Aを満たせる。(38a) の動詞 *maneuver* は③官僚言語の動詞であるが、Aiiについては「巧みに誘導されるという過程を得て、そのロシア人は精神的に変化が起きる」と考えると、被影響性を満たせる。(39a) の動詞 *die* や (40a) の動詞 *drink*、(41a) の動詞 *reach* についても同じようにAを満たせる。

上述のとおり、(37)–(41) の動詞が関与する中間構文は見られるが、形容詞的過去分詞の表現は見られなかった。なぜこのような動詞は形容詞的過去分詞になれないのかということが、今後の研究課題として残される。

3.1.4. 被影響性も形容詞的過去分詞性の両方とも満たせない動詞

97種類の動詞の中でAとBの両方とも満たせない動詞が5個あった。その動詞について以下で示していく。

- (42) a.^{*/*} This cake *makes* easily, so I recommend for beginners to try it.
(筆者のインフォーマント調査)
- b.^{??/?} She tried to get used to this *made* group, which she disliked at first. However, she has been gradually getting along with all members of the group.
(筆者のインフォーマント調査)

- (43) a. The Embassy and Foreign office seemed powerless to do anything to get us out, but a floppy disk slides easily into a diplomatic bag. (BNC: BNK)
- b.^{??} He received the *slid* coins on the spot and carried them away. (筆者のインフォーマント調査)
- (44) a. These places on a water (that attract casual anglers and, therefore, receive a lot of bait during the daytime) often *fish* well after nightfall. (BNC: HJE)
- b.^{??} People did not visit the *fished* place after the peak passed. (筆者のインフォーマント調査)
- (45) a. Communications *serve* well to achieve profit. (BNC: EW5)
- b.^{??} The *served* coffee is good. Could you show me its brand name? (筆者のインフォーマント調査)
- (46) a. Momentum's filter design product *performs* well. (BNC: A19)
- b.^{??} I am looking for the *performed* battery because I want to carry out experiments on robots. (筆者のインフォーマント調査)

(42)-(46)の動詞が関与する形容詞的過去分詞については、BNCで検索できず、インフォーマントチェックによる調査を行ったところ、bの文でそれぞれ示されるように、受け入れ不可である。従って、(42)-(46)の動詞はBを満たせない。因みに、*highly-fished* や *freshly-served* のように、副詞が含まれる形容詞的過去分詞にすると受け入れ可能となると回答があった。

以下、aで例証されている文について論じ

る。まず、⑤作成動詞に属する動詞 *make* については(42a)のとおり、AとBの条件で中間構文を形成することが不可能であると予測できることがわかった。「作るという過程の前にケーキは存在しない」ためAiに抵触する。(42a)の文についてインフォーマントチェックを行ったところ、受け入れ不可であると回答があった。従って、動詞 *make* についてはAとBの条件で予測することができる。

しかしながら、(43)-(46)の中間構文についてはBNCで見られ、Aの条件で予測することができない。まず(43a)の動詞 *slide* は⑥能格構文も関与できる動詞であり、Aiは満たせるが、Aiiについては「滑らせるという過程だけではディスクの質は変わらない」と想定すると抵触することになる。(44a)の動詞 *fish* は⑧名詞由来転換動詞に分類されるが、「人が釣りをすることで、その場所の特質が変わるとは考えられない」とするとAiiに抵触する。(44a)の主語は場所(location)を表していることにも注目したい。動詞 *serve* が用いられる(45a)についても、「扱うことによって通信技術自体が変わるわけではない」と考えられるため、Aiiを満たせない。(45a)の主語は道具を表す名詞であることも明らかで、そのような名詞は被影響性を満たせないことに気づく。

(46a)の動詞 *perform* は⑧働きかけを表す動詞と分析されるが、「製品に対して何かを行うという過程によって、その製品自体の特質が変わるわけではない」と考えられるため、Aiiに抵触する。しかしながら、動詞 *perform* は中間構文に関与できないと先行研究で述べられている。(46)についてはAとBで中間構文に関与できないと予測できるが、実際にBNCでその動詞が関与する中間構文が見られるため、事実と合わない¹⁵⁾。

以上のことから、本稿で分析した97個の動

詞の中で「AとBの双方とも満たせない動詞」が5個あり、この内4個が中間構文になれることが判明した。加えて、先行研究では中間構文不可とされている動詞 *perform* はAとBの条件を満たすことができないが、実際にはその中間構文が見られるため、当該条件で予測することができない。

3.1.5. 問題点

3.1.1節から3.1.4節の分析より、被影響性 (A) と形容詞的過去分詞性 (B) で説明できる中間構文の表現と説明できない表現があることが判明した。本分析を通して明らかになった問題点が3つある。

まず1点目に、Aのみ満たせない動詞で中間構文になれるものがある。F&Zが提案した条件では中間構文になれないと予測されるが、実際には見られるため、当該条件で予測できない。2点目としては、Bのみ満たせない動詞の中にも当該構文を形成できるものがあるということを挙げる。これについてもF&Zの分析に対する問題点となる。3点目はAとBの両方とも満たせない動詞の中には、実際に中間構文を許すものもあるということである。

これらの問題を解決できるような案について考える。Aのみ満たせない動詞に関する提案を3.2節で、Bのみ満たせない動詞に関する示唆を3.3節で、AとBの両方とも満たせないが事実と合わない動詞について3.4節で論じる。

3.2. 被影響性のみ満たせない動詞に関する提案

97種類の動詞の中で50種類の動詞がF&Zの被影響性 (A) の条件を満たすことができなかった。本節ではその内の7語を見ていく。Aの条件とは以下の通りである。

A. 被影響性の条件 (= (2))

- i) 項の指示物が行為・過程が行われる前に存在する。
- ii) 項が示す固有の特質が行為・過程によって変えられる。

Aを用いた分析を行った際、この条件に関する曖昧な点が2つあることに気づいた。まず1点目は被影響性Aiiの「特質」が具体的にどのようなものなのかが不明であるということである。これについて、提案者のF&Zは詳しく述べていない。2点目も被影響性Aiiに関することであるが、どれくらいの度合いで特質が変わるのかどうかを判断することが難しいものもある。例えば、(47) (= (29a)) や (48) (= (34a)), (49) (= (35a)) が該当する。

(47) All airbrakes *close* fully before they lock. (BNC: A0H)

(48) A pile of newspapers *bands* easily because its shape and size are the same. (筆者のインフォーマント調査)

(49) This wall *papers* well. (筆者のインフォーマント調査)

3.1.2節で示したように、(47)-(49)の文はAiiに抵触する。これらの動詞が被影響性の条件を満たせるためには、Aiiを以下のように修正する必要があるということを筆者は提案する。

(50) Aiiの修正案
行為・過程が終わった後、項が表す物質の『状態』は変わる。

修正案 (50) を用いて、(47)-(49)について考える。まず (47) は「閉めるという過程により、ブレーキが作動しなくなるという状態

に変わる」と考えられ、(50)を満たせる。加えて、(48)は「紐で縛るという過程より、新聞紙が一束にまとめられ、閲覧できなくなる」という状態変化が見られるため、(50)を満たせる。また、(49)についても「ポスターを貼るという過程により、この壁には書類が掲示されるという状態に変わる」と考えると、(50)を満たせる。このように(50)の修正案を適用すると、被影響性の条件を用いて説明できる動詞が増加する。

しかしながら、(50)の修正案を用いても説明できないタイプがある。それは、主語が道具を表すという中間構文である。これはGarcía de la Maza (2011)のような先行文献で、擬似中間構文(pseudo-middles)と呼ばれるが、特異なタイプとして分析されている。Kaga (2007)によれば、道具を表す主語構文については、使い手(動作主)が存在すると考えると中間構文は成立する。3.1.2節で紹介したとおり、(51)(=(33a))のような擬似中間構文はF&Zの被影響性Aiiに必ず抵触する。

- (51) The hollow-ground blade will cut cleanly. (BNC: CH1)

しかしAiiを(52)のように修正すると、擬似中間構文についても説明できる。

- (52) Aiiの修正案(擬似中間構文の場合) 道具を表す主語の場合、その道具を使って、潜在的被動者の状態を変えることができる。

(51)は「切るという過程により、刃という道具の状態は変わらないが、刃を使って、潜在的な物質の状態を変えることはできる」と考えられ、上記の修正案を満たせる。

上述の修正案を用いると、適格な中間構文

を予測する範囲が広がるということがわかる。被影響性の条件のみ満たせない動詞の全てが、筆者が提示した修正案を用いて説明できるのかどうかについては引き続き調査する必要がある。ところが、その修正案を用いても説明できない当該構文がある。それは、(53)(=(31a))のような典型的な中間構文や(54)(=(32a))のような達成動詞が関与する表現である。

- (53) On the whole the translation reads well. (BNC: BMK)

- (54) I think Cilla doesn't photograph well. (BNC: KPU)

(53)と(54)は上述2つの修正案で説明することができない。なぜならば、(53)は「読むという過程を通し、翻訳書の状態が変わる」とは考えられず、(54)についても「写真撮影を通し、Cillaの状態が変わった」と解釈できないためである。加えて、(53)と(54)のそれぞれの主語は道具を表す句ではないため、擬似中間構文のための修正案も適用できない。しかしながら、このような動詞は被影響性を満たさなくとも、何か別の要因があるという理由で中間構文が成立すると考えられる。その別の要因を解明することは今後の研究の課題とし、追究していきたい。

さらに、被影響性を満たす必要がないタイプとして、(55)(=(30a))のような作成動詞も該当する。作成動詞については必ずF&Zの被影響性Ai「行為・過程が行われる前に存在する」という条件に抵触する。

- (55) Queues form quickly after rumors of new supplies. (BNC: CB8)

しかし、このタイプの動詞が関与する表現に

については必ずしも Ai を満たす必要はないように思われる。中間構文の主語に現れるのは具体名詞である。抽象名詞を省くために Ai の条件が提案されたのではないかと考えられる。

以上のように、事実観察に基づく分析を行った結果、中間構文は大きく3つのタイプに分かれると考えられる。1つ目は被影響性を満たし、状態の変化を示すことができるタイプであり、(47)-(49) のような例が該当する。2つ目は、(51) のような擬似中間構文である。3つ目として、(53) の典型的な中間構文や (54) の達成動詞、(55) の作成動詞のように、被影響性を満たせないものもある。このタイプの動詞については、別の要因が働くことで構文が成立するものと示唆する。かくして、タイプごとに中間構文に関する制限があると考えられ、影山 (2004) も同様の分析をしている。

3.3. 形容詞的過去分詞性のみで抵触する動詞に関する示唆

97種類の動詞を分析したところ、形容詞的過去分詞の表現は比較的多数見られた。ところが、形容詞的過去分詞性 (B) のみを満たせないが、中間構文になれる動詞が2種類あった。本稿では、動詞に関する修正案については提示することができないため、今後の研究の課題としたい。しかしBNC検索やインフォーマント調査による事実観察の中で、1語のみの形容詞的過去分詞の表現は容認度が低いが、*well-built* や *freshly-served* のような「副詞+形容詞的過去分詞」の表現であれば、受け入れ可能であるという動詞が見られた。このような形式を許すと形容詞的過去分詞の状態を満たし、その動詞が関与する中間構文を説明できるものもある。しかしながら、副詞が含まれた形容詞的過去分詞まで許容範囲を広げると、中間構文に関与できない動詞に

についても形容詞的過去分詞性を満たすものがある。例えば、第2節で概観したように、動詞 *build* や *buy* は中間構文に関与できないとされているが、BNCで「副詞+形容詞的過去分詞」を検索すると、*newly-built* や *easily-bought* のような表現が見られる。このように形容詞的過去分詞性の条件を緩めると、中間構文に関与できない動詞も条件を満たしてしまうことが問題となる。本稿ではこの問題やその解決案について述べないが、「副詞+形容詞的過去分詞」という形式について形容詞的過去分詞性の条件に加えるべきかどうかを今後の研究課題としたい。

3.4. 被影響性と形容詞的過去分詞性の両方とも満たせない中間動詞

3.1.4節より、被影響性と形容詞的過去分詞の両方とも満たせないが中間構文になれる動詞が4語ある。その中から (56) (= (44)) の動詞 *fish* と (57) (= (45)) の動詞 *serve*、(58) (= (46)) の動詞 *perform* について考える。

- (56) a. These places on a water (that attract casual anglers and, therefore, receive a lot of bait during the daytime) often *fish* well after nightfall. (BNC: HJE)
 b.??/? People did not visit the *fished* place after the peak passed.
 (筆者のインフォーマント調査)
- (57) a. Communications *serve* well to achieve profit. (BNC: EW5)
 b.??/? The *served* coffee is good. Could you show me its brand name?
 (筆者のインフォーマント調査)
- (58) a. Momentum's filter design product *performs* well. (BNC: A19)
 b.??/? I am looking for the *performed*

battery because I want to carry out experiments on robots.

(筆者のインフォーマント調査)

(56a), (57a), (58a) のそれぞれの文を, 3.2 節の (50) と (52) で提示した被影響性に関する2つの修正案に適用した結果, いずれも被影響性の条件で説明することができるとわかった。まず (56a) は, (50) を用いると「魚を釣るという過程の後, その場所にいた魚の数が減るため, その場所の状態が変わる」と考えられるため, 被影響性を満たせる。また, (57a) の主語 *communications* は道具を表し, 擬似中間構文と考えられることから, 被影響性の修正案 (52) を用いる。(57a) の中間構文には *to* 不定詞が後続しており, 「通信技術という道具を扱うことで利益を達成できる」と解釈できるため, 被影響性の修正案で説明できる。さらに (58a) については (50) を用いると, 「製品に対して何かを行うという過程の後, その製品の状態は変えられる」と考えられるため, 被影響性の修正案を満たすことができる。

以上のように, F&Zの条件で説明できなかった文については (50) と (52) の被影響性の修正案を満たせるため, 中間構文が成り立つと予測でき, 事実と合うこととなる。しかしながら, 形容詞的過去分詞性の条件に関する修正案については本稿で示すことができないため, (56)–(58) の動詞について完璧に説明することができない。3.3節で述べたように, 「副詞+形容詞的過去分詞」という形式を形容詞的過去分詞性の条件に加えた場合, (56)–(58) の動詞について発展した説明ができるのかどうかを今後考えることとする。

4. 結び

中間構文に関与できる動詞はF&Zが提案

した被影響性と形容詞的過去分詞性の両方の定義を満たせるものであると分析されている。ところが, 大規模コーパスBNCでの調査やインフォーマントチェックによる調査を通し, 97個の動詞について事実観察を行った結果, 中間構文の中には被影響性と形容詞的過去分詞性で説明できるものとできないものがあるということが明らかである。加えて, 動詞のクラスによって中間構文を認可するための条件が変わると考えられる。

今後の課題として, なぜ動詞の中には被影響性の条件と形容詞的過去分詞性の条件で説明できないタイプがあるのかを調査し, 動詞クラスによって異なる中間構文の条件について考えていくことを挙げる。当該条件で説明できない動詞の中には, 被影響性と形容詞的過去分詞性の両方の条件を満たすことができるにも関わらず, 中間構文の形成を許さないというものもある。この問題点を解決できるような条件を考えていきたい。加えて, 形容詞的過去分詞性で説明できないものについては, 「副詞+形容詞的過去分詞」という表現を形容詞的過去分詞性の条件に当てはまるものとして考慮すべきかどうかを分析していく。

注

* 本稿は, 筆者が2019年9月13日に「金城学院大学大学院英文学会第27回大会」で発表した内容を, 加筆・修正させたものである。

- 1) Hale and Keyser (1987) は, 語彙概念構造の視点で被影響性の定義を提案している。以下, Kaga (2007) を参考にまとめる。被影響性とは, (i) の語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, LCS) を持ち, 主題 (theme) を示す主語 *y* が影響されている状態のことである。

(i) [*x* cause [*y* “undergo change”], (by

…)] (Kaga (2007: 195))

(ii) a. This bread cuts easily.

b. *This metal pounds easily.

(Kaga (2007: 194))

(iia) の動詞 *cut* は (i) の語彙概念構造を持ち、主語 *y* が影響されているため適格な文となるが、一方 (iib) の動詞 *pound* は (i) の概念構造を持たず、主語 *y* が影響されていないため不適格な文となる。F&Z は語彙概念構造を用いて被影響性について述べていない。

2) 被影響性の定義 (2b) にある「固有の特質」について F&Z は詳しく述べていない。本稿では、主語名詞が示す具体物の性質と捉え、行為・過程によってその主語名詞が持つ固有の性質が変わるかどうかを判断するものとする。

3) (4a) が被影響性の条件 (2b) を満たせるかどうかを考える際、「本自体の特質は変化しているのか」という意見もあるかもしれない。注2のとおり、F&Z は特質について明記していないが、Levin (1993: 29) は動詞 *sell* を所有の変化を表す動詞 (verbs of change of possession) として分類している。この分類に従うと、「所有者が変わることにより、本の性質が変わることになるかもしれない」と考えられる。従って、(4a) は被影響性の条件 (2b) を満たせると F&Z は説明していると考えられる。

4) 影山 (1998) は形容詞的過去分詞を完了形容詞と示している。過去分詞は形容詞的過去分詞と動詞的過去分詞の2種類に分類される。動詞的過去分詞とは (i) のようなものであり、動作を表す。

(i) Tabs have been kept on the spy.

(影山 (1998: 94))

5) 完了相と未完了相を区別する方法として

は次のようなものがある。例えば動詞 *run* について考える際、「“She was running.” が真ならば、“She ran.” も真である」と解釈できれば、未完了相となる。一方、動詞 *leave* について同様に考えると、「“He was leaving.” が真であっても、必ずしも “He left.” が真ではならない」となり、完了相となる。

6) 到達動詞については進行形が不可としているが、「～しかけている」という意味であれば進行形として現れることができる。加えて Vendler (1967) の動詞の分類については、進行形の他にも幾つかの基準がある。例えば “What happened?” という問いに答えられる動詞であるか、*in an hour* や *for an hour* という時を表す前置詞句と共起できるかというものがある。

7) (11) の動詞は、能格構文 (ergative constructions) を形成できる動詞としても分析されている。加えて、Rapoport (1999) は説明していないが、protoagent とは使役主 (cause) と同じ意味役割であると考えられる。

8) Keyser and Roeper (1984) や Fagan (1988) のような幾つかの先行文献では、中間構文の特徴として、総称的な文のみで使われ、現在時制でしか現れないと紹介されている。それゆえ、過去時制として示される (14) の全ての文は中間構文と言えるのかという疑問を持たれる可能性がある。しかしながら 萱原 (2006: 79) の通時的分析では、中間構文として最も早く生起している時制は単純現在相であったが、過去単純相や進行相の同表現は15世紀には非常に一般化し、それ以降存在すると述べられている。従って、Clark and Clark (1979) は当該構文の詳しい特徴については述べていないが、(14) の文

- を中間構文としてみなしていると考えられる。
- 9) 本稿における英語のネイティブスピーカーによるインフォーマント調査は、Matthew Taylor氏とDaniel Paller氏の2名にお願いした。
- 10) (19) の97種類の動詞は以下の先行研究の例やリストより選択している。
- Ⓐ, Ⓑ, Ⓒ, Ⓓ, Ⓔ: Levin (1993), Rapoport (1999)
- Ⓔ, Ⓕ: Keyser and Roeper (1984), Levin (1993), F&Z, Rapoport (1999)
- Ⓖ: 影山 (1998), Kaga (2007)
- Ⓖ: Keyser and Roeper (1984)
- Ⓘ, Ⓛ, Ⓜ: Levin (1993)
- Ⓚ: Clark and Clark (1979)
- Ⓝ, Ⓞ: Kaga (2007)
- Ⓠ: 影山 (1998)
- Ⓡ: F&Z
- Ⓢ: Vendler (1967), Keyser and Roeper (1984), F&Z, Levin (1993)
- ⓂについてはVendler (1967) を参考に、“過去形の動詞 + in an hour.” が可能な動詞をBNCで検索し、選出している。ちなみに定義されていないが、Ⓖの官僚言語 (bureaucratic language) の動詞については主に接頭辞 *trans-* を持つ動詞が紹介され、このタイプの動詞は驚くほど中間構文で頻繁に起こるとKeyser and Roeper (1984: 383) は示している。
- 11) 動詞のラベルについては、先行文献で多く記述されている意味分類を優先に分類している。
- 12) García de la Maza (2011: 169) によると、中間構文は典型的に法性 (modality) に関与できる。助動詞 *can* は可能性を示すことにより、当該構文として用いられることができる。BNC検索の際、総称的かつ副詞と共に起る中間構文が見つからなかった場合、助動詞 *can* が用いられる中間構文まで検索範囲を広げて調査した。
- 13) 働きかけ動詞は中間構文を形成できないと分析されているが、(ii) のように結果述語を加えると受け入れ可能とされている。
- (i) *This table *wipes* easily.
(ii) This table *wipes* clean easily.
(影山 (1998: 243))
- 14) 動詞 *obtain* については、(i) の例文を使ってインフォーマントチェックを行った。この文はKaga (2007: 202) と同じ例文であり、受け入れ可能と記されていた。ところが、1名のインフォーマントは不可、もう1名のインフォーマントはややぎこちない、という結果になった。1名のインフォーマントによると、(i) はややぎこちない表現であるが、(ii) のようなものであれば受け入れ可能ということである。すなわち、主語が (i) のような具体名詞は受け入れ不可であるが、(ii) のような抽象名詞であれば受け入れ可能となる。
- (i) (= (18c))*? That book obtains easily.
(ii) These conditions obtain everywhere.
- 15) 動詞 *perform* が関与する (46b) の形容詞的過去分詞についてインフォーマントチェックによる調査を行ったところ、2名ともぎこちないという回答があった。1名のインフォーマントによると、(i) のような表現であれば受け入れ可能であることがわかった。
- (i) I am looking for a *performed* singer who can join our chorus group.
ところが、このような表現はあまり使われず、(46b) の表現は完全に受け入れられないということである。

参照文献

- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark (1979) "When Nouns Surface as Verbs," *Language* Volume 55, Number 4, 767-811.
- Fagan, Sarah M. B. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fagan, Sarah M. B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fellbaum, Christiane and Anne Zribi-Hertz (1989) *The Middle Construction in French and English: A Comparative Study of its Syntax and Semantics*, Indiana University Linguistics Club Publications, Bloomington, Indiana.
- García de la Maza, Casilda (2011) "The semantics of English middles and pseudo-middles," *Morphosyntactic Alternations in English*, ed. by Pilar Guerrero Medina, 161-181, Equinox, London.
- Hale, Kenn and Samuel Keyser (1987) "A view from the middle," *Lexicon Project Working Papers* 10, 1-64, Center for Cognitive Science, MIT.
- Jespersen, Otto (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles* Part III, George Allen and Unwin, London.
- Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, 191-230, Kaitakusha, Tokyo.
- 影山太郎 (1998) 『動詞意味論 - 言語と認知の接点 -』 くろしお出版 東京.
- 影山太郎 (2004) 「中間構文における語彙概念構造と特質構造の相互作用」 関西学院大学紀要『英米文学』第48巻1/2号, 117-133.
- 萱原雅弘 (2006) 「中間構文に関する通時的考察」 『東京家政学院大学紀要』第46号, 73-82.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Randall, Janet H. (2010) *Linking: The Geometry of Argument Structure*, Springer, London.
- Rapoport, T. R. (1999) "The English Middle and Agentivity," *Linguistic Inquiry* 30, 147-155.
- Tenny, Carol (1987) *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*, Doctoral dissertation, MIT.
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer, Dordrecht.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, New York.

コーパス

British National Corpus (BYU-BNC) : <http://corpus.byu.edu/bnc/>